

■オープニングフェイズ

●オープニング 1：ファーストコンタクト

シーンプレイヤー：『②カブト』

登場：不可

◆解説

『②カブト』のオープニング。依頼主の剛三、相棒のルークと会話を行う。

▼描写 1

数日前、時間は昼。場所はグリーンエリアのマンションの一室。今回の護衛対象・・・鹿鳴館すみれという名のハイティーンの少女と、文字通り“顔を合わせただけ”の対面を済ませた後（すみれは逃げるように自室に戻ってしまった）。マンションの居間にいるのは依頼主・鹿鳴館剛三と、相棒の“アイアンマン”ルークだ。

ルークはその名のとおり、ハザード前のコミックヒーローのフォロワー。頑丈さが売りの全身義体カブトであり、その体には複数のスポンサー企業のロゴが張り付いている。表向きの顔が広く、社会的信用度の高いカブト。今回の仕事における君の相棒（バディ）だ。

剛三は血と硝煙の匂いがしっくりきそうな、レッガー然とした伊達男。年齢は50 前後といったところか。

▼セリフ：ルーク

「深窓のご令嬢との甘酸っぱいストーリーを期待したんだが・・・逆玉展開はこないかな、これじゃ」

「どう思うよ、『②カブト』」

【剛三退場後】

「何も聞くな、って顔だな、ありやあ」

「まあ、のんびりやろうぜ相棒。ちと地味な仕事だが額は悪くない」（前金の半額、3 シルバーを手渡す）

「んじゃま俺は後番ってことでよろしくな、相棒。また後で会おうぜ」（退場する）

▼セリフ：剛三

「手え出さねえ事を含めての人選、と受け取ってくれや」

「ともあれ、彼女を頼む」

「24 時間警護、期間は今から、ひとまず 1 週間。二人交代でどっちかがいてくれりゃあそれで構わねえ」

【護衛対象との関係、護衛の理由などを聞いた（何も言わない場合、ルークが確認する）】

「いちいち詮索すんじゃねえやい。そういう奴あ嫌われんぞ」

「きっちり護ってくれてりゃあ文句もねえよ。それ以上は期待しねえ」（退場する）

▼描写 2

部屋には君 1 人が取り残された。ふと、棚の片隅に伏せられたままのアナクロな写真立てがある事に気付く。写真には、制服を着たすみれと、同じ制服を着た・・・ヒルコと思しき少女が写っていた（髪の一部や首回り、腕などに羽毛のようなものが見て取れる）。暫くして、居間の扉が静かに開く。目の下にくまを作った長い黒髪の少女が静かに、君に対して最初の言葉を口にした。

▼セリフ：すみれ

「一緒に来てください。買い物に行かないといけないので」

【写真について尋ねた】

「覚えていません」（写真立てを伏せる。問い詰めると拒絶する）

◆結末

すみれと出かけたところでシーンを終了する。

●オープニング 2：プラチナムの命

シーンプレイヤー：『③ニューロ』

登場：不可

◆解説

『③ニューロ』のオープニング。依頼主のミシェイラと会話を行う。

▼描写

ある日の夜。場所は浅草・イエローエリアのカラオケ施設、“カラオケ FUJI”の一室。『③ニューロ』は依頼主・ミシェイラ＝アイオーンと向かい合う形で座っていた。フードキャップの隙間からにやついた笑みをこぼす女性。20 代前半、といったところか。

▼セリフ：ミシェイラ

「やあ、君が『③ニューロ』か。早速で悪いが、本題に入ろう」

「二ヶ月ほど前に起きた、地下鉄路線崩落事故。その調査をお願いしたい」

「大きな事故であったはずなんだが、情報が異常に少ない」

「自分で調べたいのは山々なんだけど、調査中に行方不明になった同業者もいるらしいんだよ」

「報酬は 1 プラチナム。全額を前払いで支払おう」

「金額の大きさは命の価値だ。私は君に支払うキャッシュで、自分の命を買っているのさ」

「私は弱い。とても弱いんだ。自分の身を守ることさえままならない」

「だからこそ。君が一流のニューロだと知ったうえでの依頼なのさ」

【依頼を引き受けた】

「ありがとう。君ならそう言ってくれると思っていたよ」

「そうそう。君自身の手に負えないと思ったら、別に手を引いてくれても構わない」

「君ほどのニューロでさえも手を引くような案件だ、と判断するまでのことだよ」

「何か面白いことがわかったら、連絡を入れてくれないかな」

「じゃあ、また後で」

◆結末

キャストは仕事に取り掛かる。シーンを終了する。

●オープニング 3：培養食品（キャンディ）の味

シーンプレイヤー：『④レッガー』

登場：不可

◆解説

『④レッガー』のオープニング。依頼主の剛三と会話を行う。

▼描写 1

鹿鳴館・剛三は君の昔なじみのレッガーだ。“渡りの”剛三と呼ばれ、連合内外・業界の裏表問わずの交渉人として知られている。そんな彼に呼び出され、『④レッガー』は新宿インペリアルパークに来ていた。平日昼間と言うこともあり、人目は少ない。

ベンチに座ったまま培養食品（キャンディ）のファストフードを不味そうに口にしていた剛三は、君に気づくと手を上げた。

▼セリフ：剛三

「おう、『④レッガー』。こっちだ」

「最近、CFC が質を改善した新製品ってやつを出してるらしいぜ。アレだかアルとかいう」

「どんなに味を変えようが所詮はキャンディだと思うんだがなあ。広告の宣伝文句に引っ張られる連中ってなあ何時になってもいるもんだぜ」

「品薄商法ってえやつなんだろうよ。たかが缶詰 1 つに転売で結構な値がついていやるが」（そこから、企業情勢、組の近況といった世間話をいくつかわえ、やがて話は本題に入った）

「さて、折り入って、手前に頼みてえ事がある」

「ここ 1 週間ほど、猟奇殺人事件が連続して起きてんのは知ってるか」

「イエローはもとより、グリーン、ホワイトまで起きてる。ま、レッドの方はあとわからねえが」

「殺人事件なんざイヌの仕事だ。本来なら、俺らの知ったこっちゃねえ」

「だがな、俺の身内でも 1 件、先日起きちまってる。このまま放っておいたんじゃあ、沽券に関わる」

「方法は問わねえ。この件、調べちゃくれねえか」

「イヌ連中の腰も重い。ちとヤバい匂いがすんだよ。だからこそ、手前にしか頼めねえ。・・・引き受けちゃあ、くれねえか」

▼描写 2

そう、本来はイヌの仕事だ。レッガーに関わるような話じゃあない。身内云々の話があったとして、相手がわからない状況から動くというのは妙な話だ。しかし、まっすぐに君に向けられた眼差しは、真剣そのものだ。何か事情があるのだろう。君にはそう直観できた。

▼セリフ：剛三

（依頼を引き受けた）「すまねえ、助かる」

「こいつはまあ、駄賃みてえなものだと思ってくれ」（1 ゴールドを渡す）

「じゃあ、頼んだぜ」

●オープニング 4：探偵の仕事

シーンプレイヤー：『①フェイト』

登場：不可

◆解説

『①フェイト』のオープニング。依頼主のリエと会話を行う。

▼描写

人探しの依頼、というのは、探偵の仕事としては至極スタンダードな依頼といえるだろう。持ち込んだ相手が市民権の無いヒルコであり、探す対象が死体である、という点を除けば。

「人を探して欲しい。名前はルウ。私と同じ顔をしている。多分、もう死んでいる」

イラム族のリエ、と名乗った少女はそう切り出した。外見こそ人間に近いが、髪の一部や首回り、腕などに羽毛のようなものが見て取れる。服装も独特の意匠をこらした、かなり露出の高いものだ（アンモニア・アベニューあたりでは見慣れた気もするが）。

時間は昼。窓から入ってきた依頼人に少々困惑しつつも、『①フェイト』は応接間で彼女から話を聞いていた。

▼セリフ：リエ

「見つからないなら、それでも構わない。でも、どこかにいるのなら、引きたい」

「探偵というのは、顔と名前がわかれば探すことができる特別な人間だと聞いた。お前も“探偵”なんだろう？」

【誰に聞いた？】

「ヒルコ街で教えてもらった。お前は腕のいい“探偵”、と聞いた」

【断ったらどうする気だ？】

「無理だというなら、自分で探すだけだ」

【報酬は？】

「これが報酬だ。それなりの金になると聞いている」

（不思議な光を放つ小さな石を差し出す。ヤマタイの重汚染区域に出現する、特定の大型ヒルコの体内から見つかる希少なものと聞いたことがある。未加工のものだが末端価格でも 1 ゴールドにはなるだろう。）

【どこからこんなものを？】

「自分で戦って得たものに決まっているだろう。私はイラムの戦士だ」

【何故死んだとわかる？】

「其の時は遠くにいたから、場所を感じることはできなかった。でも、いなくなったのはわかった」

「この街に来たのにルウの事を感じない。多分、死んだのだろう」

彼女の説明は分かり難かったが、「双子の共感覚」と呼ばれる現象に近いもののようだ。

【依頼を引き受けた】

「そうか、助かる。この街はよくわからないことばかりで、実は少し困っていた」

「今は“マヨイガモリ”という場所で厄介になっている。見つかったら教えてくれ」

「私の方でも探してみる。これでも、鼻は利くほうだ」

◆結末

言うが早いのか、彼女は窓から飛び出すと、両の腕を翼に変え、一瞬で飛び去ってしまった。キャストが仕事にかかったところでシーン終了。

●オープニング 5：話題の新商品

ルーラーシーン

登場：〈社会：N◎VA、企業、メディア〉10

◆解説

CFC の宣伝広告。キャストが登場した場合、どこかで宣伝を見ている演出とする。

▼描写

街頭 DAK で CFC の宣伝広告が流れている。

▼セリフ：宣伝広告

「R シリーズの R はリボーン（再誕）の R！」

「あなたの培養食品に対する価値観が生まれ変わります！」

「R シリーズをご存じですか？」

「キャンディ・フーズ・コーポレーションが自信をもってお届けする、マイクロ・バイオ技術の集大成！」

「R シリーズの R はリピートの R！」

「一度食べたらヤミツキ！元の食生活には戻れません！」

（「この食品は違法性のある薬物などは含有されておらず、安全です」のテロップが流れる）

「R シリーズの R はリサーチの R！」

「皆さまのニーズにお応えして、続々と新商品を展開中です！」

「気になったあなたは、今すぐアクセス！」

「大人気御礼！予約された方の中から抽選で均等公平に商品をお届け致します！」

◆結末

宣伝は繰り返し流されている。シーンを終了する。